

宰府画報

第22号

2024年4月
(令和6年)

発行 市会課
宰府委員
文化財
太宰府
教育
文化

逸品探訪

秋景山水図

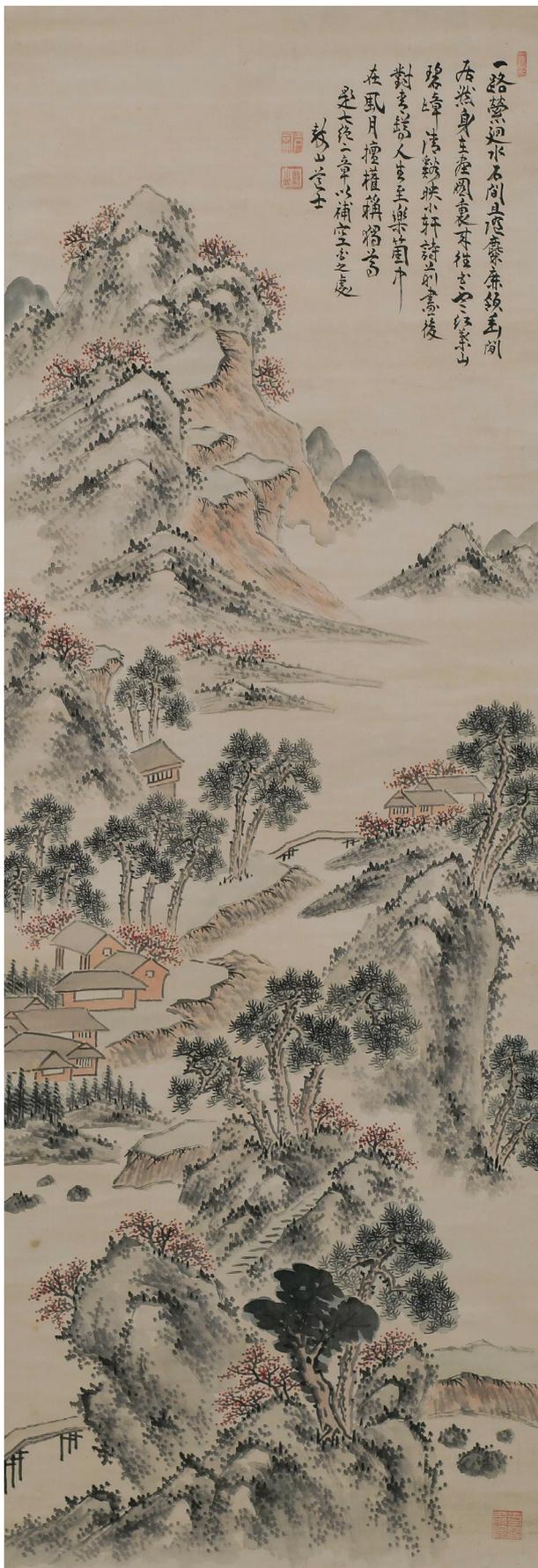
吉嗣鼓山作

どれも似通っていて見分けがつかない、漢字だらけの賛文も何を書いているのかわからない。掛け軸に描かれたこのような山水画に多くつきまとうネガティブイメージ。確かにその通りで、実際この作品を紹介しようとしている私自身も、なかなか難しいなど頭をひねる次第です。という言い訳はさておいて、とにかく画面をよく見てみましょう。

画面の下方、近景に1本の道があり、奥へ進むと中景に人家が立ち並んでいます。その背後にはごつごつとした高い山があり、さらに遠くにも山並みが見えます。中景から近景にかけては低い雲霞が立ち込めていて、人や鳥、船などはありません。ひっそりと静かな風景ですが、赤く色づいた木々が画面全体に描かれていて、温かな雰囲気を感じさせています。

画賛には、「一路縈廻水石間（一本の道が水石の間をめぐる）」「身在畫図裏來往白雲紅葉山（絵の中に我が身を投じて、白雲や紅葉した山の中を行き来する）」など、この画面とリンクする文言があり、こうした風月の世界を「人生至楽」と誇っています。

りも平明で整理された感があり、暖色系の彩りを加えた山水図を多く描いています。また、くつきりとしてしなやかな行書体の書風は一目で鼓山とわかる個性です。制作年は記されませんが、他作品との比較から、昭和20年代半ば以降、同32年に没するまでの晩年作と思われる。鼓山の画風、書風、そして境地をよくあらわした作品です。（井形栄子）



1幅 絹本墨画淡彩 掛幅装 146.3 × 50.4cm
昭和前半 吉嗣家資料

調査見聞

ふたりの鼓山

鼓山が疎開？

令和5年(2023)夏に開催した「吉嗣家交友録―近代文人の書と絵画」展(6/10〜7/17、於大宰府市文化ふれあい館)終了後のある日。宗像市の個人の方から、自宅に吉嗣鼓山の作品があるのを見てほしいという連絡がありました。展覧会を開催するとしばしばこのような情報提供があり、新たな作品に出会えることがあります。今回は、戦後の物資不足の一時期、その自宅に鼓山が住み込んで絵を描き、米などの食糧と交換していたといういわくつき。そのような履歴があったなど初耳なので、一見にしかずと調査に伺いました。



北川鼓山作《松鶴図》
紙本着色 掛幅装
昭和24年(1949)作 個人蔵

北川鼓山

見せていただいた作品は《松鶴図》(左写真)、《恵比寿大黒図》、《松に小禽図》、《風景図》の4点で、いずれにも「鼓山々樵」の署名がありました。また、《松鶴図》には「己丑」、《恵比寿大黒図》と《松に小禽図》には「庚寅」の干支があつて、制作年が昭和24年(1949)と同25年であることもわかりました。しかしながら、どことなく何となく、絵の作風や賛の書風が、これまでに見知った鼓山のものとは異なるような気がします。そうして一旦帰り、もう一度絵や落款を見直してみると、落款印の印文に苗字とおぼしき「北



(右) 北川鼓山の落款
(左) 吉嗣鼓山の落款

川」の文字があり、果たして吉嗣鼓山と同じ時期に活動していた「北川鼓山」なる絵師がいたことが判明したので。吉嗣鼓山よりも5歳年下の加賀生まれの人で、清国に渡った経験もあるといふ(※1)、篆刻家高畑翠石が大正12年(1923)に記した随筆「鉄筆日記」に「若松市の画家北川鼓山君」として登場し、この時点で北九州にいたことが確認されました(※2)。

ふたりは知り合い？

さらに探索を続けると、なんと吉嗣家資料の中に下写真の通り「北川鼓山参考画」と題書きされた白紙交じりの画帖があり、その中に北川鼓山のものかと思われる図があつたのです。「参考画」の意味するところは不明ながら、ふたりの鼓山が知り合いだった可能性も出てきました。

さてひよつとしたら…、やっぱり！ それぞれ明治〜大正期に活動していた画家に、京都の平井梅仙、山形の石川拜山という人物がいるではありません



表紙に「北川鼓山 参考画」と題された画帖中の一図
吉嗣家資料



【参考文献】
※1 千集画会本部編『大正大家千集画譜』前編 聚文舎、1923年
※2 『筆之友』281号、書道奨励協会、1924年

か。しかも石川拜山は吉嗣拜山と同様に山水図も描いていたようです。何事も先入観にとらわれてはならないと、あらためて気づかされた調査でした。
(井形栄子)

関係者
名鑑

Vol.2

宮小路浩潮

生没年 文政9〜明治37（1826〜1904）
関係者 吉岡梅仙、吉岡拜山

プロフィール

筑前国の人。夜須郡の医師森下春台の子。12歳の時に太宰府天満宮の社家六度寺に入り実乗坊仙賀を名乗る。その後比叡山延暦寺で修行し、嘉永2年（1849年）に権大僧都に任じられ、同5年に太宰府へ戻り六度寺の住職となる。明治維新後還俗し宮小路康文と名乗り、浩潮と号す。享年73歳。

宮小路浩潮は太宰府でなじみ深い書家として知られますが、幕末は仙賀と名乗る僧として活動していること



太宰府市役所の「議事堂」扁額 70.5cm × 177cm



《中西耕石肖像》
画：吉岡拜山
賛：宮小路浩潮
吉岡家資料

が『宮小路家文書』から知られます。嘉永6年（1853）には六度寺の住職として福岡藩2代藩主の黒田

が『宮小路家文書』から知られます。嘉永6年（1853）には六度寺の住職として福岡藩2代藩主の黒田

忠之の200回忌法要、藩祖黒田如水の250回忌法要を行ったほか、雨乞のための水瓶祈禱を四王寺山の岡見山（水瓶山）でおこなっています。

明治時代からは能書家として活躍し多くの揮毫依頼が来しました。明治23年（1890）には伊藤博文の命で帝国議会の国会議事堂扁額の揮毫を、同28年には平安神宮応天門の扁額を揮毫しています。また、太宰府市役所5階にある

「議事堂」扁額も彼が手掛けたものです（左上写真）。制作年代は不明ですが旧庁舎にあったものを移したようで、太宰府村もしくは町時代のものでしょう。

吉岡家には浩潮の書が3点が伝わり、吉岡梅仙の古稀を祝うものもあります。また、拜山が木村耕巖・大城谷桂樵とともに、中西耕石20回忌にあたって制作した肖像画（左写真）には、「耕石先生肖像」の題字を寄せています。

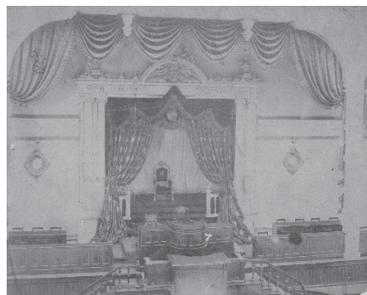
（木村純也）

メイショ メイブツ

宮小路浩潮 「帝国議会」の揮毫と記念の品

明治23年（1890）の議会開設が間近に迫る中、議事堂の建設は急務でした。しかし当初計画された東京・永田町の大建築は工期・予算ともに間に合わず、内幸町に木造の仮議事堂が建てられることになりました。

仮議事堂は同年11月24日、すなわち第一回帝国議会の招集日前日によく竣工し、29日には明治天皇臨席のもと開院式が行われます。その玉座の上に掲げられた「帝国議会」の四文字を揮毫したのが、太宰府出身の書家・宮小路浩潮でした。当時の図面によると、扁額の大きさは縦四尺七寸（142cm）、横一丈三尺（39.4cm）、一文字の大きさは三尺（91cm）と記されています。しかし、完成からわずか二ヶ月後、仮議事堂は焼失してしまいます。昼夜



第2回仮議事堂 貴族院議場
個人蔵



（上）青銅製の筆洗
（下）寿山石獅子鈕印材
個人蔵

兼行の突貫工事により、十ヶ月後に第2回仮議事堂が再建されると、浩潮は再び揮毫を依頼されました。

二度の揮毫を記念し、明治天皇から青銅製の筆洗、貴族院・衆議院から鈕（つまみの部分）に獅子が彫られた寿山石製の印材が贈られ、共に福岡県の文化財に指定されています。

関東大震災で倒壊を免れた第2回仮議事堂も大正14年（1925）に再度焼失、第3回仮議事堂を経て、現在の国会議事堂が完成したのは、昭和11年（1936）のことでした。太宰府市文化ふれあい館では、開催中の「近代のきらめき〜古写真が伝える太宰府の文人たち」（7月21日まで）で、左の印材を展示しています。

（井上理香）

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料

山姥図

片膝を立てて座り、じつと前方を睨みつける老婆。頭髮や衣服は乱れており、口元から除く鋭い歯も相まって、どこか人間離れた不気味な雰囲気を感じさせます。傍らに柿の入った籠と、小鎌が置かれていたことから、収穫後のひと休みの場面でしょうか。

この老婆は、山姥といつて、山岳列島である日本において、山にいる神や物の怪の類として生み出された存在です。能などの題材にも取り上げられ、特に近松門左衛門の「**山姥**」という浄瑠璃では、山姥は、坂田公時、いわゆる金太郎の母とされています。



紙本墨画淡彩 52.6 × 40.2cm 弘化3年 (1846)

画稿の裏面には、焼筆の痕が残ります。焼筆とは、木の枝を燃やして作った道具で、裏面から図様をなぞることで、別の紙に転写することができます。この画稿もそのように模写などに使用されたものとわかりません。(日野綾子)

この画稿の原図は、昨冬に九州国立博物館で特別展が開催されていた絵師、長沢芦雪(1754~199)の《山姥図》(遠山記念館所蔵)です。原図では、縦長の画面の中で、崖の先端に山姥が座り、遠くに三日月が見えるという構図ですが、画稿では山姥の部分のみが写されています。芦雪は円山応挙(1733~195)に師事しており、この画稿が齋藤家にあることは、円山四条派を学んだ家系として、齋藤家の絵師が流派の作例の図様を収集していたことを示しています(ちなみに画面右下の描印は応挙の「仲選」印を模したものです)。

ひとこと
くずし字

習 静

せわしなく過ぎる日々流され、自分の感性を磨くことも忘れてしまふ今日この頃。そんな時に心に留めたいのがこの言葉です。「座禅をして心を静かにしようとする」という意味で、静かな空間で一人思索に集中する光景が浮かんできます。唐の官僚王維が作った『積雨輞川荘の作』の一節に、「山中習静観朝槿(山中に習静して朝槿を観じ)」と、山中で座禅を組み槿の花を見て無常を悟る様子がうたわれています。

画像を見ると、「習」という字はひらがなの「ぬ」のように、自は「々」のように崩れています。「静」も大きく崩れ、右側の「争」はひらがなの「る」のようにも見えます。典型的な草書体で、力強い筆遣いです。

この書を書いた二条基弘(1859~1928)は京の公家である九条家の出身で二条家に養子入りし家督を継ぎます。貴族院議員を務めたほか、書に精通した人物として、歌・書作品を多く遺しており、吉嗣家には年不詳の書画作品が2点伝わります。

吉嗣家と二条基弘の関係は詳しく分かりませんが、基弘は明治35年

(1902)に京都北野天満宮で行われた菅公没後千年祭を取り仕切った北野会会長も務めており、そういった経緯で太宰府天満宮ともつながりがあったのかもしれませんが。(木村純也)

この資料



二条基弘作 書《習静》
絹本墨書 未表装 30.0 × 76.4cm 吉嗣家資料

編集後記

絵師調査が知られることで調査依頼も増えました。家に絵師の資料がある方は気軽に文化財課までご相談ください。(木)

くずし字や漢文を読むのは至難の業。でも辞書を片手に頭をひねるのは、きっと老化防止になるはずと思ひ込む今日この頃です。(井)